

電波政策 2020 懇談会 サービス WG モバイルサービス TF (第 3 回) 議事要旨

1 日時

平成 28 年 3 月 1 日 (火) 14:00~16:00

2 場所

中央合同庁舎第 2 号館 (総務省) 7 階 省議室

3 出席者 (敬称略)

構成員:

森川主査、三瓶主査代理、岩浪構成員、宇佐見構成員、栄藤構成員、河合構成員、木谷構成員、黒田構成員、島田構成員、浦田代理 (関根構成員代理)、谷口構成員、丹波構成員、橋本構成員、林構成員、藤原構成員、行武構成員

総務省:

福岡総合通信基盤局長、渡辺電波部長、佐々木総合通信基盤局総務課長、田原電波政策課長、中沢移動通信課長、新田国際周波数政策室長、中村新世代移動通信システム推進室長、小川移動通信課企画官、庄司電波政策課企画官

4 議事要旨

(1) 開会

(2) 議事

① 構成員等からの発表

資料に基づき、木谷構成員、宇佐見構成員、栄藤構成員、丹波構成員、谷口構成員及び構成員発表関係者から説明が行われた。

② 事務局からの説明

資料に基づき、事務局から説明が行われた。

③ 質疑応答・意見交換等

構成員等からの発表及び事務局からの説明の後、質疑応答・意見交換等が行われた。内容は以下のとおり。

- スマートフォンの大量の制御信号により通信障害が引き起こされるなど、想定外の事態が発生したこともある。QoS の検証等も含め、「用途」の実証実験に取り

組むことが重要である。

- 欧州の重点5分野は、コンパクトにうまくまとめられているが、少ないという印象。農林水産業や物流、スマートシティといったものが入ってきてもよいのではないか。
- ナローバンド5Gが、5Gに入るか入らないかの議論はあるが、この部分はビジネスとしては影響が大きい部分である。アンライセンズバンドの活用なども含め全体的な整理が必要。
- 5G時代にどのような社会をめざすのか、色々な分野を整理してICT側からクラスタリングしていくという作業がもう1回必要となるだろう。大容量通信と低速で安価な通信では要件も変わってくるだろう。
また、このような社会においては、IoTのセキュリティをどう確保していくかが根本的な問題となってくる。
- 日本独自の戦略が必要。①戦略性、②網羅性、③深さの3点が重要。戦略性については、課題解決に加え、成長戦略の観点が必要。網羅性については、欧州の5分野を少なくともカバーしておくことが必要。深さについては、深いメンバーが集まっているので、これを活かして深いプランができると良い。
- 5Gによりビット単価が安くなって起きる「量の変化」と、5Gの特徴を活かした「質の変化」の両面からとらえ、5G時代にどういったサービスを提供するか考える必要がある。
- ITSに利用する上で不安なのは遅延の問題であり、5Gなどの無線通信だけでなく、自動車側・クラウド側の処理も含めた全体で考える必要がある。自動車はリアルタイムな様々な情報等を集めて高速処理を行うことが重要であり、渋滞制御や信号の調整にもある程度リアルタイム性が求められている。
また、実証実験などのトライアルの場が無いと、具体的な利用のアイデアも出てこないし、アイデアが出てきても確認できない。
- レイテンシは物理的、地理的に決まるものであり、制御システムにおいては、サーバーとクライアントを近づけるというアプローチを行っている。ITSは複雑であり、コントロールする側とされる側の双方が同じ車である。また、車同士の調整は完全に自律となっており、それを調整できる全体システムをどのように作ってい

くかが課題。

- ネットワーク機器の場合は PoC と商用で溝があり、PoC は例えば、経路選択を早くする目的でやるのだが、5G はその順番ではだめだろう。アプリ特有の事情やネットワークの使い方があり、ベンダーとしては、ネットワーク機能をアピールするのではなく、使う人が何を実現できるかを優先して考えて進めると PoC と商用の溝が埋まるだろう。
- 韓国はオリンピックのある 2018 年に実現したものを 5G のスタンダードにして、そのままアプリケーションも使い続けるとしている。われわれもそのくらいのつもりで考えていくべき。
- キラーアプリが何になるか分からない中で、将来に残る共通項（帯域の拡大、レイテンシ等）を考えて行く必要がある。車関係者とキャッチボールをしながら考えて行くのも一案。
- 自動走行や未来の ITS が実現した時に何が起きるのか。自動運転車での余暇時間が増えればそれに伴った産業創出が考えられ、ここで生じる（走行系ではない）新たな通信需要もまた莫大だと思う。
- 欧州は自動運転を社会システム的に活かしていこうとしている。自動走行技術で、都心の駐車場が不要になり土地の有効利用が可能になることや、物流の効率化など、どう社会システムへ適用していくかが課題。
- 今後、どういったものを実証実験としてやっていくかについてアイデアコンペをやるのも一案。欧州のように、大規模な予算投資の大きな枠組みのなかでコンペを行い、実証実験に結びつけていくというやり方もあるのではないかと。
農業等であれば、広い畑等に適した周波数というものもあるだろう。用途も考えて対応していく必要がある。

④その他

事務局から、次回会合の日程・場所等について説明が行われた。

(3) 閉会

以上